

とかす力（八木重吉の詩を愛好する会会報）

（事務局及び会報）〒270-1406 千葉県白井市中 205 小林正継

Eメール kmat27aiko@gmail.com 携帯電話 09061674553

☆ 第 **35** 号

☆2025年（令和7年）

11月26日発行

★2025年の茶の花忌報告

かつては秋晴れの時期であった茶の花忌の時期が、今年は長雨の時期になってしまい、早くから雨の天気予報が出て、雨天中止も一時考えました。しかし再来年に重吉没後100年を迎えるので、それまでは茶の花忌を中止にしたくないという気持ちが勝って、雨天でも実施と言う方針に急遽変更しました。茶の花忌のたびにお世話になっている青木幸雄さんに、テントを張って頂き、愛好会仲間（伊藤由利子、太田きよ子、津原豊子、桑原恵美、池田彩乃、十松弘樹）で夏から準備してきた計画を予定通り実施する事が出来ました。また土砂降りの雨にはならなかったこともあり、雨天の割には多くの方が集ってくれた茶の花忌でした。

〇13:00～13:30 墓前礼拝（讚美歌、祈り、感話）

司会進行（小林） 感話（苅部幹央氏、元横浜女学院教師で重吉研究者）

例年通り、重吉愛唱歌「神よおじかの」を歌い、祈りに続いて、今年は長年の重吉愛好者である苅部幹央氏にお話をいただきました。



感話 — 「詩こそ ^{うた}哀しき」から「わがよろこびの ^{うた}頌歌は消えず」へ

まず苅部氏の重吉との出会いの歴史が語られた。その中で、重吉の詩に登場する言葉の一つ「かなしみ」がいつしか氏の研究の最大テーマとなり、その成果は、10年前の茅ヶ崎での講演八木重吉における「こころ」と「かなしみ」となって結実したが、この「かなしみ」は重吉の詩の魅力を説く言葉であり、クリスチャン詩人と言われはしても、宗教を超えて愛される重吉の文学的な深さを象徴していると語られた。そしてやはり「かなしみ」を深くとらえ、存在の秘儀と見る若松英輔氏が待望の岩波文庫から重吉詩集を発行したことは詩の願いでもあったこと、そして八木重吉の詩人としての評価が定まった出来事だとも語られた。

〇13:30～15:30 八木重吉を偲ぶ会

今年はプロの朗読家である原きよさんに司会を担当いただきました。

前半（合同で） 13:30～14:30



- ・主催者開会の挨拶（小林）

昨年から愛好会主催になり、「愛好者が作る茶の花忌」と言う考えで運営していることを伝えました。

- ・講話

今高義也氏（『八木重吉とキリスト教』（新教出版社）の著者）

仙台からはるばる来て頂きました。現在、今高氏は重吉の愛読した新約聖書の書き込みの研究論文を『信徒の友』に連載中で、あと数回で終了し、1冊の本にしたいという事でした。従来研究されてこなかった貴重な研究になります。その緻密な分析には皆さんも驚かれることと思います。

小澤則男氏（茨城キリスト教学園の教師を退職後、重吉の詩や聖書の言葉に画を付け、詩画展開催）

茨城県の日立市から来て頂きました。重吉の詩を授業で単に紹介するだけでなく、重吉の心をもって教え子たちと接して来た歴史があり、詩画展にも多くの教え子たちが集ってきます。

- ・重吉のライブ演奏・歌唱（YO=ENさん）

茶の花忌恒例のライブ演奏・歌唱となっており、今年は、〈草はうつくしい〉〈愛〉〈太陽〉〈まり〉〈おほぞらの水〉の5曲を歌いあげました。「八木重吉 YO=EN」で検索すると YOUTUBE で動画が見られます。

- ・重吉詩の朗読（希望者による好きな詩の連続）

応募した朗読希望者たちが心を込めて詠み、重吉詩の魅力を共有しました。最後の方の詩は司会者の原きよさんに読んでいただきました。来年は読みたいという人もいて、まさに愛好者で作る茶の花忌を具現する企画になっていきそうです。

後半(2つに分かれての活動) 14:30~15:20

① 歴史散策 (案内は町田市民文学館の学芸員神林由貴子さん)

雨ふりだったらテント内での解説会にすることを考えましたが、雨がやんでいて予定通り出発し、昨年より多い人々が参加し、重吉が遊んだであろう場所を歩くという体験が良かったようです。神林さんは、タウン誌に重吉詩の解説文を連載中で今年も最新号を配布してくださいました。

② 庭での活動 (記念館見学、書籍・CD等展示及び頒布、語らい交流等)

今年発行された岩波文庫の詩集は用意した数冊全部売り切れしました。

再集合(全員) 15:20~15:30

讃美歌(重吉愛唱歌の1番のみ)を再度歌い、閉会の挨拶を小林がしました。重吉没後100周年までは愛好者で良い茶の花忌を作っていきたいので来年も協力をお願いしますと訴えて終わりとなりました。

○ 茶の花忌終了後、希望者は橋本駅で茶話会

雨という事もあり、4人の集まりでしたが、大雨にならずに実施できたことを喜び合いました。

* 統計的な報告

参加者約70名(受付簿記入者60名+スタッフ10名余り)、初参加者28名(近隣の人々が多い)、昨年からの連続参加者20名、アンケート提出者10名(来るのを楽しみにしていて、感動した方が多かった)。

★「茅ヶ崎八木重吉・詩碑建立20周年記念の会」の報告

亀井瑞世

10月2日(木)、茅ヶ崎の詩碑建立20周年、詩の朗読会が、茅ヶ崎の高砂緑地内にある詩碑「蟲」の前で行われ、無事終了しました。嬉しかったことに、その日は、「とかす力」の案内を読んでくださった方が3名ありました。埼玉県から1名、東京の国分寺市から1名、その友人の方が1名鎌倉から来て下さったのです。

○ 重吉の詩を朗読する仲間あり

茅ヶ崎ゆかりの詩人を偲びて

○ 「蟲」の詩碑「いま ないておかなければ」と 建立祝いの十月二日

○ 「蟲」の詩碑伊達冠石の色寂びて

日輪も美し二十年を経て



2025年10月2日(木)
八木重吉詩碑建立20周年記念日 朗読会
プログラム

10:00 詩碑の前で 開会
司会進行 川井春江
挨拶 茅ヶ崎八木重吉の会代表 川井盛次
詩碑「蟲」朗読 川井春江
詩碑「蟲」合唱 重吉の会会員(贈面配布) 亀井瑞世

10:20 美術館アトリエへ移動

10:30 美術館アトリエにて 朗読会 開催
司会進行 亀井瑞世
挨拶 川井春江
冊子「花と咲く」朗読 川井盛次(代読) 太田きよこ 川井春江
亀井瑞世(各自 自分の掲載文を読む)
詩の朗読の前に 八木重吉詩集 「秋の盛」より
「序」川井春江 「私の詩」亀井瑞世 「花と咲け」太田きよこ

* 子どもの本を読む会会員の方々 4名の自己紹介と詩の朗読
無題(百貫さん) 素朴な琴(小野さん)
花(板橋さん) イエス(藤本さん)

* 八木重吉の会会員 詩の朗読 (川井盛次)(川井春江)(太田)(亀井)

* 茅(かや)短歌会(濱岡さん)他 参加者の方々に配布資料の詩の朗読

11:00 感想 その他 ご歓談
11:20 閉会の挨拶 川井春江
11:30 閉会

今日の朗読会が皆様の良き思い出となり、八木重吉の詩が心の支えとなって、明日への生きる力となりますように！
本日はありがとうございました！！

★参加者の方々がインターネットで公開した茶の花忌の感想から抜粋

・タウン紙「玉川つばめ通信」発行人、うのつのはるこさん

ところで八木重吉、ですが、私はほぼほぼ知りませんでした。教科書に詩が載っていて早くに亡くなった人、くらいの認識でした。まさか町田に生家があるなんて、大地沢青少年センター(今は違う名前)のすぐ近くだなんて知りませんでした。とはいえ私、高校生、大学生のときは詩人になりたいと思っていたので(食

べていけないだろうとも思いやめました) 詩はたくさん読んでいました。萩原朔太郎、立原道造、茨城のり子、吉原幸子、伊藤比呂美、岡田隆彦、そして銀色夏生 (ロックな詩を書く人が好きでした) ……八木さんは完全スルーだったのですが、今日、雨の中、八木重吉記念館@相原で久しぶりに詩の朗読を聴いたら胸にぐいぐい染み込むのがわかりました。詩の朗読は小旅行のようで、新しい詩が読まれるたびに私の心はいろんなところに飛んでいきました。さらに茶の花忌では、八木重吉に魅せられた YO-EN さん、というじつに魅力的な声のアーティストさんの弾き語りもありました！会場は屋外のテントで外は雨。雨の匂いを感じながら目をつぶって YO-EN さんの歌声を聴いていたら、さらにさらに遠くまで、どこまでも行けそうな感覚になりました (過去にも未来にも)。YO-EN さんの声には固定観念や常識を壊しちゃうような、不思議なパワーがありました (山崎ハコっぽい感じもしました)。彼女のライブも見に行きたいです！以下、一番心に響いた詩を引用します。

「水や草はいいかたがたである」 (詩集 貧しき信徒より)

はつ夏の/さむいひかげに田んぼがある/そのまわりに/ちさい ながれがある/草が水のそばにはえて
いる/みいんないかたがたばかりだ/わたしみたいなものは/顔がなくなるような気がした

・町田市議で落語家の三遊亭らん丈さん



・昨日、八木重吉没後 98 年「茶の花忌」が、厳かに営まれたので、参加させていただきました。八木重吉は、現在の町田市相原町に生まれ、育った、近代日本を代表する詩人のひとりです。八木重吉の詩を愛好する会事務局長の小林正継さんのご挨拶、墓前礼拝、講話、YO-EN さんによる重吉のライブ演奏等盛りだくさんのプログラムで、充実した時間を過ごすことが出来ました。ありがとうございました。

写真は、重吉の代表詩「素朴な琴」が刻まれた岩です。この詩碑がよかったです。



◎
◎

・俳人の大井恒行さん

閑話休題・・八木重吉没後 98 年「茶の花忌」・YO-EN
ライブ「八木重吉を唄う」 於:八木重吉記念館

10月26日(日)午後1時半から、「八木重吉を偲ぶ会」(主催:八木重吉の詩を愛好する会)、講話に八木重吉研究家の今高義也、小澤則男。重吉詩の朗読、そして、重吉のライブ演奏歌唱として YO-EN が重吉詩を作曲したオリジナルの歌をギター弾き語り。その後、重吉関係文学散歩、記念館見学なども行われた。雨の中の茶の花も可憐だった。



・朗読家 原 きよ さん

10月26日 22:21

今日は詩人 八木重吉の98年目の命日でした。町田市の八木重吉記念館では「茶の花忌」として毎年、八木重吉を忍びます。今年、初めて参加し、スタッフの一員として司会を務めて参りました。八木重吉の詩を愛する方々が集まって開く茶の花忌、とても温かな会でした。八木重吉の詩に曲をつけて歌っている Yo-en さんの歌声はそぼ降る雨の中、空へ響き、とても心地よく、研究者の方々の貴重なお話にも触れて、かなり有意義な時間でした。町田市の学芸員さんのガイドツアーでは、重吉が幼い頃に行った川の音を聞き、通った小学校跡へも行き、重吉の詩を愛する者として、重吉をより近くに感じることが出来ました。来月からの学校公演で読む重吉さんの詩が、私の中により浸透しました。



★作曲家 熊木衛さん死去

11月2日 熊木衛氏が亡くなったとの知らせを受けました。熊木氏は八木重吉の詩を愛好する会が出来て間もなく参加するようになり、詩碑「原っぱ」の除幕式典の時には、熊木氏の作曲による曲「原っぱ」が、金野実加枝さんの独唱により披露されました。八木重吉を愛する思いは、若い時から持っており、登美子夫人との交友も早くからあったようで、池袋の福音ルーテル教会（登美子夫人が東京にいた時代に通っていた教会）にも出入りしていて、青山学院大学の教授をしていた田坂誠喜氏（作詞家でもある）とも親交があった様で、その当時の写真を見せてくれたことがありました。また愛好会の会報（その当時は「いっぽんのみち」）にも29回にわたって「私が見つけた重吉の詩による歌曲」というタイトルで、色々な重吉の詩を用いた曲を紹介してくれました。CDや雑誌も、いろいろ出していて、重吉の詩に曲をつけるという活動を逸早く始めた人の一人でした。茶の花忌でも一時期、毎年いろいろな歌手とコラボして発表していました。

その後諸事情から、愛好会から離れて行きましたが、その旺盛な活動は続いていたと思います。そして古くからの八木重吉関係資料を保持していました。それらがどうなったのかわかりませんが、貴重な資料と思われるものが、かなりあったのではないかと推察します。ここでは熊木氏の本業の音楽関係から、インターネット上に出ているCDを紹介しておきます。



★東葛飾高校創立100周年記念行事行われる。

11月7日（金）八木重吉が創立2年目に赴任して行き、1年余り教えた千葉県東葛飾高校（当時は旧制中学）で、創立100周年を祝う式典が開かれました。100周年に伴う寄付金を集めてした事業の一つがセミナーハウス（兼同窓会館）の改修であり、このセミナーハウスの愛称は「秋瞳館」です。昭和63年に建てられるとき、この名が与えられたようですが、明確にどういう経過でつけられたのか知る人はいません。ただ3年前の昭和60年に「八木重吉の詩を愛好する会」が結成され、その年のうちに詩碑「原っぱ」を建立し、その建立委員会に、同窓会が大きく関わっていましたので、まだ新しい「原っぱ」の詩碑が校庭の一角に立っていて、しかも道路に面して向いており、多くの行きかう人々が見るわけですから、愛称として詩集『秋の瞳』のイメージが浮かんだ人々がいた事は容易に推測されます。そのセミナーハウスの改修が100周年記念事業の一つとなったことは、神様の導きかもしれません。100周年記念誌には、たまたま同窓会の役員の一人名になっている私の文章、「東葛飾高校と詩人八木重吉」を入れてもらう事も出来ました。重吉もくぐったであろう、ギリシャ風のモダンだった玄関は、モニュメントして保存され、生徒達から〈パルテノン〉と呼ばれ親しまれています。重吉の面影を偲べる「原っぱ」と「秋瞳館」と「パルテノン」という記念物が残っていることを私は誇りに思っています。「母校に重吉を偲べる場所を残せた！」今そういう思いです。